

Weak type の interpolation theorems

東北大理 猪狩 惺

§ 1. 序

この目的は二つの空間 $L_{\lambda}^{(p, \lambda)}(\Omega)$ と $H^p(\mathbb{R}_+^{n+1})$ に関する補間定理を述べることである。

現在では、作用素の補間定理は補間空間の構成という立場から論ぜられることが多い。それらのうち広く知られているものとして、例之は Calderón [1], Lions [8] および Lions - Peetre [9], Peetre [10] などの方法がある。

前者は, Riesz - Thorin の補間定理を Calderón - Zygmund が Phragmén - Lindelöf の定理を用いて透明に証明しているが, その方法を活かしただけで所謂複素関数論的方法によるものといえる。一方, 後者二つの中では関数を具合のよい二つの部分に分解するという方法がみられる。このように考へ方は Marcinkiewicz の補間定理の証明の中に見ることができ

そこでは複素関数論的方法はとらえておこう。

始めに述べた二つの空間 $L_k^{(p, \lambda)}$, H^p に対しては, Riesz-Thorin や Marcinkiewicz のと類似した補間定理がかりたい。そしてそれらと上にあつた構成された補間空間との関係は, 例之は Kree [7], Spanne [12] などで示されている。しかしそれらが一般的有空間の一つの例にすぎないか否か, あるいはそれらを包含する一般的な有空間の構成はどうか, ということも思ふべき。

§ 2. 空間 $L_k^{(p, \lambda)}(\Omega)$.

空間 $L_k^{(p, \lambda)}(\Omega)$ は John-Nirenberg [6] や Campanato [2], [3] などで述べられている。更に Spanne [12] Stampacchia [13], [14] に従つてそれを述べる。

Q は常に n 次元ユークリッド空間 R^n の各辺が座標軸と平行な立方体を表わすものとする。 Ω は R^n の連結開集合で, 中心が Ω に含まれ $\text{diam}(Q) < 2 \text{diam}(\Omega)$ なるすべての Q に対して

$$|\Omega \cap Q| / |Q| \geq \delta > 0$$

がなりたつものとする, ここに δ は Q に無関係な定数である。 P_k を n 変数, 次数 $\leq k$ なる多項式全体とする。

定義. $1 \leq p < \infty$, $-\infty < \lambda < \infty$, $k \geq 0$ は整数とする。

$\mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}(\Omega) = \mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}$ は次のように Ω 上の局所可積分関数 u の集合である;

$$[u]_{\mathcal{L}} = \sup_{\theta} \left\{ \frac{1}{|\theta|^{\frac{\lambda}{p}}} \inf_{P \in \mathcal{P}_k} \int_{\theta \cap \Omega} |u - P|^p dx \right\}^{1/p} < \infty,$$

ここで Q は中心が Ω に含まれ $\text{diam}(Q) < 2 \text{diam}(\Omega)$ である。

$[u]_{\mathcal{L}}$ の定義で右辺として特別なもの τ とすることが出来る; 立方体 Q に対して $\{\varphi_j\} \in \mathcal{P}_k$ の内積 $(f, g) = \int_{Q \cap \Omega} f \bar{g} dx$ に関する正規直交基とする, 但し便宜上 φ_j は定数関数としておく, そのとき

$$P(Q)u = P_k(Q)u = \sum_j (u, \varphi_j) \varphi_j$$

とあくと

$$\|P_k(Q)u\|_{L^p(Q \cap \Omega)} \leq C \|u\|_{L^p(Q \cap \Omega)}$$

となる, C は u, Q に無関係な定数である. 従って

$$\begin{aligned} \inf_{P \in \mathcal{P}_k} \|u - P\|_{L^p(Q \cap \Omega)} &\leq \|u - P(Q)u\|_{L^p(Q \cap \Omega)} \\ &\leq (1+C) \inf_{P \in \mathcal{P}_k} \|u - P\|_{L^p(Q \cap \Omega)}. \end{aligned}$$

ゆえに $[u]_{\mathcal{L}}$ の定義で P は $P(Q)u$ とおきかえてもよい。

定義. $C^{(k)}(\Omega)$ は $\bar{\Omega}$ 上 $\tau \leq k$ 次の連続な導関数 τ 階関数 u の集合とする. $C^{(k, \alpha)}(\Omega)$, $0 < \alpha \leq 1$, は $u \in C^{(k)}(\Omega)$

で

$$[u]_C = \sum_{|Q|=k} \sup_{x, y \in Q} \frac{|D^k u(x) - D^k u(y)|}{|x - y|^\alpha} < \infty$$

なる u の集合とする.

定理. $1 \leq p < \infty$, $k \geq 0$ は整数, $\lambda \geq 0$, $\alpha = (\lambda - n)/p - k$ とする.

$$(i) \quad \alpha > 1 \text{ ならば } \mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} = \mathcal{P}_R.$$

$$(ii) \quad 1 \geq \alpha > 0 \text{ ならば } \mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} = C^{(R, \alpha)}.$$

$$(iii) \quad 0 > \alpha \text{ ならば 整数 } k, \alpha + k - 1 < k, \text{ に対して}$$

$$\mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} \cap L^p(\Omega) = \mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} \cap L^p(\Omega).$$

$$(iv) \quad \mathcal{L}_R^{(p, 0)} = L^p(\Omega) + \mathcal{P}_R.$$

§ 3. 空間 $E_k(\Omega)$.

$k \geq 0$ を整数とすると, すべて $p \geq 1$ に対して

$$\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}(\Omega) = \mathcal{L}_R^{(p, n+pk)}(\Omega)$$

であること Campanato [3] は示した. 従って $\mathcal{L}_R^{(\infty, \infty)}$ に代るものとして $E_k(\Omega)$ を $\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}(\Omega)$ として定義する. E_R の半ノルム $[\]_{E}$ は $[\]_{\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}}$ と与える.

定理. $u \in L^1_{loc}(\Omega)$ とするとき次の条件は同値である.

$$(i) \quad [u]_{\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}} < \infty,$$

$$(ii) \quad [u]_{\mathcal{L}_R^{(p, n+pk)}} \leq \text{constant for all } p \geq 1$$

(iii) ある $\beta > 0$ に對して

$$\sup_{\theta} \frac{1}{|\theta|} \int_{\theta \cap \Omega} [e^{\beta |u - P_k(\theta)u| / |\theta|^{\frac{k}{n}}} - 1] dx < \infty,$$

(iv) ある $\beta' > 0$ に對して

$$\sup_{\theta} \sup_{\sigma > 0} \frac{1}{|\theta|} e^{\beta' \sigma / |\theta|^{\frac{k}{n}}} \text{meas} \{x \in \theta \cap \Omega : |u - P_k(\theta)u| > \sigma\} < \infty.$$

(iii) \rightarrow (ii), (iii) \rightarrow (iv) は明らか, (iv) \rightarrow (ii) は容易に示される. $k \geq 1$ のとき (i) \rightarrow (ii) であることは Campanato [3] に於ける. 従つてこのときは (ii) \rightarrow (iii) は容易に示される. $k = 0$ のとき (i) \rightarrow (iv) であることは John - Nirenberg [6] に於ける.

§ 4. 空間 $\mathcal{N}_k^{(p,\lambda)}(\Omega)$ と $\mathcal{M}_k^{(p,\lambda)}(\Omega)$.

Ω は互いに素な中心が Ω にあり $\text{diam}(\theta) < 2 \text{diam}(\Omega)$ である δ の有限個の互いに素な立方体からなる集合の族とする.

定義 $1 \leq p \leq \infty$, $-\infty < \lambda < \infty$, $k \geq 0$ を整数とする.

$\mathcal{N}_k^{(p,\lambda)}(\Omega) = \mathcal{M}_k^{(p,\lambda)}$ は次の条件をみたす Ω 上の可積分な関数 u の集合である:

$$[u]_{\mathcal{N}} = \sup_{\{\theta_j\} \in \mathcal{Q}} \left\{ \sum_j \left(\frac{1}{|\theta_j|^{\frac{k}{n}}} \int_{\theta_j \cap \Omega} |u - P_k(\theta)u| dx \right)^p |\theta_j| \right\}^{1/p} < \infty.$$

容易にわかるように

$$E_k(\Omega) = L_k^{(C, n+k)}(\Omega) = N_k^{(C, n+k)}(\Omega).$$

定義. $1 \leq p < \infty$, $-\infty < \lambda < \infty$, $k \geq 0$ を整数とする.

$\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}(\Omega) = \mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}$ は次の条件をみたす Ω 上の可測関数 u の集合である:

$$[u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}}$$

$$= \sup_{\theta} \sup_{\sigma > 0} \sigma \left[\frac{1}{|\theta|^{\frac{\lambda}{p}}} \text{meas} \{x \in \Omega \cap \theta : |u - E_k(\theta)u| > \sigma\} \right]^{\frac{1}{p}}$$

$< \infty$.

Kalmogorov の不等式から明らかなる

$$[u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}(\Omega)} \leq [u]_{\mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}(\Omega)}$$

である. 更に次のように関係が成り立つ.

定理. $1 < p < \infty$, $k \geq 0$ を整数, $\lambda \geq n$ とすれば,

$$[u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda-n)}(\Omega)} \leq C [u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}(\Omega)},$$

すなわち C は u に無関係な定数である.

証明は次に示す補助定理を用いて John-Nirenberg [6] の論法を適用すればよい.

補助定理. $u \in L^1(Q \cap \Omega)$, Q の中心は Ω に含まれ
 $\text{diam}(Q) < 2 \text{diam}(\Omega)$,

$$s \geq \frac{1}{|\Omega|} \int_{\Omega, \Omega} |u - P_k(\Omega)u| dx$$

とする。このとき Ω に含まれる中心が互に異なる素高度が可算個の Ω_j と、 δ , m だけ互に隣接する定数 κ が存在して次の δ_j が成り立つ。

$$(i) \quad |u(x) - P_k(\Omega)u| \leq s \quad \text{a.e. in } \Omega, \Omega \setminus \bigcup \Omega_j$$

$$(ii) \quad |P_k(\Omega_j)u - P_k(\Omega)u| \leq \kappa s \quad \text{in } \Omega_j$$

$$(iii) \quad \sum_{j=1}^{\infty} |\Omega_j| \leq \kappa s^{-1} \int_{\Omega, \Omega} |u - P_k(\Omega)u| dx.$$

§ 5. 補内定理.

以上述べた空間 Λ の写像に対する補内定理を主に Stampacchia [13], [14] に従って述べる。これは古くから知られた $Riesz$ -Thoron, Marcinkiewicz の定理が単純に導かれるものである。しかし結果は自明であることが有効である。

定理 1. $1 \leq p_i, q_i \leq \infty, -\infty < \lambda_i < \infty$ ($i = 0, 1$),

$k \geq 0$ の整数とする。 $0 < \theta < 1$ に対して

$$1/p_\theta = (1-\theta)/p_0 + \theta/p_1, \quad 1/q_\theta = (1-\theta)/q_0 + \theta/q_1,$$

$$\lambda_\theta = (1-\theta)\lambda_0 + \theta\lambda_1$$

と置く。

\mathbb{T} が $L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{L}_k^{(q_i, \lambda_i)}(\Omega)$ への線型写像として、 $\forall M_i (i=0, 1)$ に対して、 τ が、
 $\|\mathbb{T}u\|_{\mathcal{L}_k^{(q_i, \lambda_i)}} \leq M_i \|u\|_{p_i}$ が成り立つ、 $L^{p_0}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{L}_k^{(q_0, \lambda_0)}(\Omega)$ の写像として、 $\forall C \leq C M_0^{1-p_0} M_1^{p_0}$ となる、 C は \mathbb{T} 、 u に無関係な定数である。

証明. $J_Q u = u - P_k(Q)u$ とおけば、 $J_Q \mathbb{T} : L^{p_i} \rightarrow L^{q_i}(Q \cap \Omega, |Q|^{-\frac{\lambda_i}{n}} dx)$ のノルムは $C_i M_i$ であることを示す。
 従って、測度の変化を含めた Riesz-Thorin の定理 (Stein-Weiss [15] 参照) を適用して Q に τ として \sup をとる式が得られる。

同様にして Marcinkiewicz の定理から次の定理が導かれる。

定理 2. $1 \leq p_i \leq q_i < \infty$, $p_0 \neq p_1$, $q_0 \neq q_1$ とする。 λ_i, k, p_0, q_0 は前定理と同様とする。

$\mathbb{T} \in L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{M}_k^{(q_i, \lambda_i)}(\Omega)$ への線型写像として、 $\forall M_i (i=0, 1)$ に対して、 \mathbb{T} は L^{p_0} から $\mathcal{L}_k^{(q_0, \lambda_0)}$ への写像として、 $\forall C \leq C M_0^{1-p_0} M_1^{p_0}$ となる。

定理 3. $p_i, q_i, p_0, q_0, \lambda_i, \lambda_0, k$ は定理 1 と同様とする。 $\mathbb{T} \in L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{N}_k^{(q_i, \lambda_i)}(\Omega)$ への線型写像として、 $\forall M_i$ であるとする ($i=0, 1$)。このとき $\mathbb{T} : L^{p_0}$ への線型写像よりゆるい条件が成り立つ。

$\rightarrow \mathcal{N}_k^{(\rho_0, \lambda_0)}$ のノルム $\leq M_0^{-\rho} M_1^{\rho}$ である。

証明. $\{Q_j\} \in \mathcal{Q}$ とする. 複素数 z , $0 \leq \operatorname{Re} z \leq 1$, τ に対して $S^z: \mathcal{N}_k^{(p, \lambda)}(\Omega) \rightarrow L^1(L(\Omega); (\mathbb{Z}^+, |Q_j| d_j))$

$$S^z v(Q_j) = \frac{1}{|Q_j|^{\frac{\lambda z}{n}}} [v(\cdot) - P_k(Q_j)v(\cdot)] \chi_{Q_j}(\cdot)$$

に δ を定義すれば,

$$S^z T: L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu) \rightarrow L^{q_i}(L(\Omega); (\mathbb{Z}^+, |Q_j| d_j))$$

は解析的線型, z に対して $\operatorname{Re} z = z$ ($z = 0, 1$) のとき, $\|T\| \leq M_i$ である. ρ による Stein の補間定理 (Calderón [1]) に δ を求めた詳細をしよう。

定理 4. $p_i, q_i, \rho_0, \rho_1, \lambda_i, \lambda_0, k$ は定理 2 と同様とする. $T \in L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{N}_k^{(q_i, \lambda_i)}(\Omega)$ へのノルム M_i による線型写像とすれば, $T: L^{p_0}(M, \mathcal{M}, \mu) \rightarrow \mathcal{L}_k^{(q_0, \lambda_0 - \rho)}$ のノルム $\leq C M_0^{-\rho} M_1^{\rho}$ である。

証明は δ 4 の定理と定理 2 を用いると δ 11.

定理 4 は $q_i = \infty$ であるとしても δ 11. 実際上の定理は $\mathcal{N}_k^{(q_i, \lambda_i)}$ と $\mathcal{N}_k^{(\infty, n+k)} = \mathcal{E}_k$ と $\mathcal{M}_k^{(q_0, \lambda_0)}$ とあるから δ 11 になり得る。

以上 4. の定理で $L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ は一般の補間空間であるから δ 11. しかし特別な場合を除いて空間 $\mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}$ や $\mathcal{N}_k^{(p, \lambda)}$ などはあるから δ 11. したがって δ 11. したがって δ 11.

である (Stein - Zygmund [16] 参照).

§ 6. 応用例

典型的な応用例として Riesz ホルティング変換及 Calderón-Zygmund 型の特異積分を考慮してみよう.

a は \mathbb{R}^n 上の可測関数で, $1 \leq r \leq \infty$ に対して

$$\left(\int_{|y| \geq At} |a(x-y) - a(-y)|^r dy \right)^{1/r} \leq A, \quad |x| \leq t$$

とす. $\mathbb{T}u = u * a$ とおく.

$1/p_0 - 1/q_0 = 1/r'$, $1/r + 1/r' = 1$, $p_0 < r'$ とす.

もし $\mathbb{T}: L^{p_0} \rightarrow L^{q_0}$ が有界ならば, すなわち $1/p - 1/q = 1/r'$, $1 < p$, $q < \infty$ に対して $\mathbb{T}: L^p \rightarrow L^q$ は有界である.

これを証明するには, $\mathbb{T}: L^{r'}(\mathbb{R}^n) \rightarrow \mathcal{N}_0^{(\infty, n)}(\mathbb{R}^n) = E_0(\mathbb{R}^n) = \mathcal{L}_0^{(1, n)}(\mathbb{R}^n) = \mathcal{L}_0^{(q_0, n)}(\mathbb{R}^n)$ が有界であることを示せばよい. 仮定から, $\mathbb{T}: L^{p_0}(\mathbb{R}^n) \rightarrow L^{q_0}(\mathbb{R}^n) \subset \mathcal{L}_0^{(q_0, 0)}(\mathbb{R}^n) \subset \mathcal{N}_0^{(q_0, n)}(\mathbb{R}^n)$ は有界だから定理4を用い, 示されるからである.

実際, $u = u_0 + u_1$, $u_0 = u$ ($|u| < At$), $= 0$ ($|u| \geq At$) とおくと

$$\|\mathbb{T}u_0\|_{q_0} \leq C \|u_0\|_{p_0} \leq C' t^{n/q_0} \|u\|_{r'}.$$

$$|\mathbb{T}u(x) - \mathbb{T}u(0)| \leq \left(\int_{|y| \geq At} |a(x-y) - a(-y)|^2 dy \right)^{1/2} \|u\|_{L^2},$$

ゆえに, $c = \mathbb{T}u(0)$ とおくと

$$\left(\int_{|x| \leq t} |\mathbb{T}u(x) - c|^{2/q_0} dx \right)^{1/q_0} \leq C t^{n/q_0} \|u\|_{L^2}.$$

従って, $\|\mathbb{T}u - c\|_{L^{q_0}(\Omega)} \leq C |\Omega|^{1/q_0} \|u\|_{L^2}$ が中心 0 の立方体 Ω に対して成り立つ。これは平行移動によつてすべての立方体 Ω に対して成り立つから,

$$\|\mathbb{T}u\|_{L^{q_0}(\Omega)} \leq C \|u\|_{L^2(\mathbb{R}^n)}.$$

か之である。

以上の一の応用例として, 定理 1 の $\mathbb{T}: L^{p_i} \rightarrow C^{(k_i, \alpha_i)}$ は有界線型写像に対して適用される。

§7. 空間 H^p に対する補局定理.

定義. $H^p(U)$, $p > 0$, Ω の δ は単位円の内部で解析的円関数 $f(z)$ の集合である;

$$\|f\|_p = \sup_{0 < \lambda < 1} \left(\frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} |f(\lambda e^{i\theta})|^p d\theta \right)^{1/p} < \infty.$$

この空間を半平面上の関数で考えたものは $H^p(\mathbb{R}_+^{n+1})$ である。
 $f(x, y) \in H^p(\mathbb{R}_+^{n+1})$, $x \in \mathbb{R}^n$, $y > 0$, とは $n+1$

1) の調和関数系 (f_0, f_1, \dots, f_n) で次の条件をみたすものという:

$$\frac{\partial f_0}{\partial y} + \sum_{i=1}^n \frac{\partial f_i}{\partial x_i} = 0, \quad \frac{\partial f_0}{\partial x_i} = \frac{\partial f_i}{\partial y}$$

$$\frac{\partial f_j}{\partial x_i} = \frac{\partial f_i}{\partial x_j}, \quad i, j = 1, \dots, n,$$

$$\|f\|_p = \sup_{y>0} \left(\int_{\mathbb{R}^n} \left[\sum_{i=0}^n |f_i(x, y)|^2 \right]^{p/2} dx \right)^{1/p} < \infty$$

ヒルベルト変換 \mathcal{H} の $M. Riesz$ の定理および $\mathcal{Caldwell-Zygmund}$ の不等式からして, $p > 1$ のとき

$$H^p(U) = L^p(0, 2\pi), \quad H^p(\mathbb{R}_+^{n+1}) = L^p(\mathbb{R}^n)$$

(ノルム同値) である。

従って次に述べる定理は p_0 かつ $p_1 = 1$ のとき意味をもち、

定理 $p_i, \varrho_i, p_0, \varrho_0$ は §5 の定理 2 と同様とする。 \mathbb{I} は

$$|\mathbb{I}(f+g)| \leq \kappa (|\mathbb{I}f| + |\mathbb{I}g|)$$

をみたす H^{p_i} から ν -可測関数への写像で

$$\sup_{\sigma>0} \left[\nu \{s \in \mathbb{N} : |\mathbb{I}f(s)| > \sigma\} \right]^{1/\varrho_i} \leq M_i \|f\|_{H^{p_i}}$$

($i = 0, 1$) とすれば、 \mathbb{I} は H^{p_0} から $L^{\varrho_0}(\mathbb{N}, \nu)$ への有界写像で、 $\|\mathbb{I}\| \leq C \kappa^2 M_0^{1-\varrho_0} M_1^{\varrho_0}$ である。 $\therefore H^p$ は $H^p(U)$ かつ $H^p(\mathbb{R}_+^{n+1})$ をみたす。

証明は, Marcinkiewicz の補間定理の Zygmund に よる証明法と特異積分の“悪い部分”の評価を組合せておこなう (Igari [5] 参照).

注意. \mathbb{R} を線型, $\|\mathbb{R}f\|_{L^p_i} \leq M_i \|f\|_{H^p_i}$, $H^p = H^p(U)$, とすれば, 定理の結論は $0 < p_i < \infty$ としてお成りたすことと知らせている (Salem-Zygmund [11], Weiss [18]). しかしその方法はこのように weak type p は適用できない (Strichartz [17]).

$H^p(U)$, $p > 0$, および $H^p(\mathbb{R}^{n+1})$, $p \geq (n-1)/n$, の補間空間が至るは明らかである.

引用文献

[1] A. P. Calderón, Intermediate space and interpolation, the complex method, *Studia Math.*, 24 (1964) 113-190.

[2] S. Campanato, Proprietà di Hölderianità di alcune classi di funzioni, *Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa*, 17 (1963), 175-188.

[3] S. Campanato, Proprietà di una famiglia

di spazi funzionali, *ibid.* 18 (1964), 139-160.

[4] S. Campanato, Teoremi di interpolazione per trasformazioni che applicano L^p in $C^{k,\alpha}$, *ibid.* 17 (1964) 345-360.

[5] S. Igari. An extension of the interpolation theorem of Marcinkiewicz, *Proc. Japan Acad.* 38 (1962), 731-734, *Tōhoku Math. J.* 15 (1963) 343-358.

[6] F. John and L. Nirenberg, On functions of bounded mean oscillation, *Comm. Pure Appl. Math.*, 14 (1961), 415-426.

[7] P. Krée, Interpolation d'espaces qui ne sont ni normés, ni complets, *Ann. Inst. Fourier*, 17 (1968), 137-174.

[8] J.-L. Lions, Une construction d'espaces d'interpolation, *C. R. Acad. Sci.*, 251 (1961) 1853-5.

[9] J.-L. Lions et J. Peetre, Sur une classe d'espaces d'interpolation, *Publ. I.H.E.S.*, Paris n° 19 (1964) 5-68.

[10] J. Peetre, Nouvelles propriétés d'espaces d'interpolation, *C. R. Acad. Sci.*, 256 (1963), 54-

55.

[11] R. Salem and A. Zygmund, A convexity theorem, Proc. Nat. Acad. Sci, U.S.A., 34 (1948) 493-7.

[12] S. Spasse, Sur l'interpolation entre les espaces $L^p, \bar{\mathbb{R}}$, Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa, 20 (1966) 625-648.

[13] G. Stampacchia, $L^{(p,\lambda)}$ spaces and interpolation, Comm. Pure Appl. Math., 17 (1964) 293-306.

[14] G. Stampacchia, The spaces $L^{(p,\lambda)}$, $N^{(p,\lambda)}$ and interpolation, Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa, 19 (1965) 443-462.

[15] E. M. Stein and G. Weiss, Interpolation of operators with change of measures, Trans. Amer. Math. Soc., 87 (1958) 159-192.

[16] E. M. Stein and A. Zygmund, Boundedness of translation invariant operators on Hölder spaces and L^p -spaces, Ann. Math., 85 (1967), 337-347.

[17] R. S. Strichartz, A multiplier version of the Marcinkiewicz interpolation theorem, Proc. Amer. Math. Soc., 21 (1969) 441-4.

[18] G. Weiss, An interpolation theorem for sub-

Linear operations on H^p -spaces, Proc. Amer. Math. Soc.,
8 (1957), 92-9.